

[5月のことば]

農産物を外国から 買えない時代が来る

東北大学名誉教授
農学博士 藤原 彰夫

世は5月、若葉の候として世界は緑の光に満ち満ちているが、考えてみると、そうそう楽観もできない。人間が地球上に生きている限り、地球の資源は消費され、地球上は汚染とまではゆかなくとも、環境の悪化は避け難い。環境悪化の問題だけでなく、その基本となる資源の消費は、見逃し難い大きな疑問を、人類の将来に投げかけてくる。農産物の増産は太陽エネルギーの利用だから、地球上に影響無しとは云い切れない。窒素はさておき、燐酸とカリは地球上には平均的に分散されてはいない。或る国々には多く埋蔵され、或る国々一例えば日本には全く恵まれていない。農産物を大量に収穫しようとすると、施肥しなければならぬ。施肥は燐酸やカリのような地下資源の採掘と移動が前提条件となる。

たしかに、世界の人口も紀元2,000年には70億に達するだろうし、それに伴う生活資材、殊に食糧の補給は大きい問題になる。

昨年の世界的な食糧作物の不作は世界中に「飢の時代が来る」というショックを与えた。北極に居すわった寒冷気塊が時どき暖かい地帯へおりて来て、低温障害のいたづらをする。またこのあおりで、暖かい地帯のモンスーンに異常が出て、旱魃と豪雨が作柄を狂わせる。或る気象学者は、暖かい間水期はもう終って、すぐ冷たい氷河期が来るとおどす。

昨年はソ連、東欧などで小麦、飼料作物が不作であり、東南アジア諸国では米が凶作となった。

差当って輸出可能な国はアメリカとカナダだ。特にソ連は食糧確保のため米・ソ接近をはかったともいわれ、小麦収量は前年に比べて1,900万トンの減少で、これを補うために、米国を中心として1,800万トンも買付けたといわれる。中国も不作で、小麦の輸入量は500万トンに近いとみられている。

こういう世界的食糧情勢のなかで、米国が従来の生産調整政策を解いて、増産政策に方向転換をした。幸いに農民の協力もあって、小麦などは10%の増産が見込まれているようだ。

今のところ食糧の大生産国の米国をはじめ、カナダ、アルゼンチン等が増産に踏切っているから良いようなものゝ、労力、価格等の関係から、増産が不可能となった

ら大変な事態をひき起すおそれがある。たとえ或る地域で食糧が増産されて、しかも輸出の意志はあっても、船舶が無ければ食糧は移動しない。大量の食糧移動に要する船舶は想像を絶する。

日本の飼料事情のひっ迫は、ただに生産国の生産事情だけでなく、小麦を主とする食糧の世界的移動に船舶をとられたことも、大きい影響をあたえている。47年度の日本の配合飼料の輸入依存度は60%に上り、価格の高騰と輸入のひっ迫で、今まで「洋食」をくっていた日本の家畜に危機を叫ばせることになってしまった。

これまでは主生産国で増産の意志があり、輸出に乘気だからよいようなものの、もし主生産国の情勢が変わり、船舶がひっ迫するときのことを考えると、肌寒い思いがする。

農産物は太陽エネルギーの利用だから一と、すましていられる間は良いが、増産を押しすすめてゆくと肥料資源が必要になり、農機具を動かすためエネルギー源が必要になってくる。

これらの資源の消費を問題として、資源保有国が輸出を搾(しば)ってくると、すぐ農産物の増産にひびく。

すでに米国は、国内の石油資源の消費を慎しみ始めたまたカリ資源を温存するため、国内のカリ鉱山の採掘量を抑え、燐礦石についても同様の方向へ傾きはじめた。

西独はカリの大供給国であったが、近年採掘量を意識的に抑えてきて、カリの年産量は全く横ばいである。

主な増産国はカリについてはカナダ、燐礦についてはソ連であるが、これらの国が資源の温存を考えはじめたらどうなるだろう。必要なものは日本で生産しなくても、余っている外国から輸入すれば良いという理窟は、もう通らなくなってしまった。

経済問題をはなれて、地球上の資源の温存ということ各国が考え出すと、ますます厄介になってくる。日本は肥料資源のうち、燐酸とカリは完全に輸入に頼っているが、これも永久に今と同じように楽(らく)に輸入させてくれるとは限らない。

ましてや、農産物は世界の人口増の圧力を受けるうえに、生産資材とエネルギー源からも制限をこうむると、日本の注文通り買付けることは出来ない。好むと好まないにかかわらず、自給度の向上が最大の命題となることは間違いない。

いずれにしても、資源をもたない日本は、米の生産調整をやり、またこれを解くというような愚策ばかり繰返さず、世界の中の日本の位置を、単に経済政策からのみとらえることなく、地球上の資源と汚染の立場から長期的に考えてもらいたい。総合農政でなく、総誤農政だったというようなことは、して貰いたくないものである。